

編集後記

「言語文化」第三七号をお届けする。今年度、言語文化研究所は一〇月に学内外の六名の講演者による「みなと区民大学」(全六回)を開催し、多数の熱心な受講者にお集まりいただいた。そのみなと区民大学の講演内容が今号の特集である。

さて、二〇一九年度の本研究所のその他の活動について簡単に報告しておきたい。五月一九日には畠山達氏(フランス文学科准教授)による企画で、「フランス音楽と詩の楽しみ」コンサートをフランス文学科と共催した。お互いに影響を与え合った近代フランスの文学と音楽についてのレクチャー・コンサートであり多くの来場があった。詳細については畠山達氏の報告を参照されたい。六月三日には西堂行人氏(芸術学科学科教授)による企画として「古川健氏講演会・劇葉の

つくり方」が開催された。芸術学科学科身体表現コースでは毎月一回、学内で「演劇原論講座」を開催しているが、本講演は一般公開講座として、最も刺激的な劇作家・古川健氏をお呼びし、演劇の効能、劇の種、劇作の可能性について語っていた。こちらについての詳細も西堂行人氏の報告を参照されたい。

尚、三月一五日に予定されていた西堂行人氏(芸術学科学科教授)による企画「持続可能な唐十郎演劇―生誕80周年記念シンポジウム」、および三月一六日に予定されていた本多まりえ氏(英文学科准教授)企画による「メディアと子供・児童文学のトランスカルチュラルな展開」と題したシンポジウムは、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、急遽開催延期となった。苦渋の決断であるが、年度を改めて開催予定であるので、今後言語文化研究所ホームページで詳細をご確認いただきたい。

最後となったが、今年度も無事様々なイベントの開催や「言語文化」の発行を終え、至らないところも多々あったと思うがなんとか二年間の言語文化研究所所長という役目を全うすることができたのは研究所委員の皆様と、何よりも言語文化研究所事務担当の伊東絢さんの尽力のお陰である。ここに感謝したい。

(平岩 健)

*

フィリップ・ゴーチエ氏の論文「没入、ソーシャルメディア、そしてトランスメディアのストーリーテリング―「包含」型受容」(翻訳 難波阿丹)は、言語文化研究所と日本映像学会映像教育研究会共催で二〇一八年五月二五日一八時から一三五一教室で行われた講演会の発表原稿の翻訳である。当日の通訳は、慶応義塾大学法学部教授佐藤元状氏が担当し、司会を本学芸術学科学科教授齊藤綾子が担当した。

講演の概要は、インターネットを利用した新しいソーシャルメディア環境が生み出したフィクションの世界が、従来型の物語叙述が作り出す物語世界とその受容の様式や形式を変えつつあり、その変化はさまざまなメディアのフォーマットの境界を越えて、トランスメディアナラティブとも呼ばれるフィクション世界をも創り出し、それは私たちの現実世界とフィクション世界の交流のあり様にも影響を与えているという議論である。『マーブル・ホーネット (Marble Hornets)』というトランスメディアナラ

ティブの事例を引きながら、ゴーチエ氏は、このような受容様式の変化を「包含 (inclusive)」型と捉える最近のメディア理論を援用しながら、すでにハリウッドの大手スタジオはこのようなメディア環境の変化に対応すべく、あらたな戦術と製作方針を打ち出していると指摘する。「インタラクター (interactor)」と呼ばれる受容者の新しい概念は、文学研究や映画研究で、「読者」「観客」と呼ばれて

きた概念の再考を促すものであり、文学研究者や映像研究者にとっても、刺激的な議論だと思われる。

ゴーチエ氏は、現在カナダのクイーンズ大学でメディアと大衆文化について教えているが、ハーバード大学のSSHRCで二年間のポスドク研究員を終え、現在本論の議論をさらに広げ精緻化し、アムステルダム大学出版から出版予定の単著 *Transmedia Storytelling and Social Media: Paratexts, Characters and Interfaces* を執筆中である。氏の論文は *New Review of Film and TV Studies*、*Animation*、*Film History*、*Cinemas: Journal of Film Studies*、*Cinema & Cie*、*Studies in French Cinema* などに掲載されている。ゴーチエ氏の初期アニメーションに関する論文「トリックの問題：初期の線画アニメーションは映画ジャンルか、特殊効果か？」(翻訳 宮本裕子) が、芸術学専攻の大学院紀要『パンダライ』一五号(二〇一六年三月)に掲載されたのをきっかけに交流が始まった。

翻訳を担当した難波阿丹氏は聖徳大学聖徳ラーニングデザインセンター准教授で、主要論文に「映像・情動・身体：情動的観客とハリウッドの物語映画」(東京大学博士学位論文、二〇一九年)、「ユニクロの Air-Rhythm：インターフェイシング(相互調整)と触覚的価値の再創出」(『vanitas』〇〇五号、二〇一八年)などがある。当日の司会を担当してくれた佐藤氏と難波氏は日本映像学会映像教育研究会のメンバーで、お二人の協力があって当日の講演会が実現した。ゴーチエ氏と佐藤・難波両氏に感謝したい。(齊藤綾子)